



市長 からの 手紙

64 江戸そして東京

先日、江戸東京博物館名誉館長の竹内誠先生たけうちまことの講演を聞きました。講演の要旨は、歴史を学ぶことは現在をより深く知ることになる、そして未来に生かせる知恵にもなるということでした。江戸時代の庶民生活や経済の実態等についての極めて興味深いお話でした。

私は次のことが印象に残りました。なお、以下に記す数字や言説は講演を聞いた私の記憶によるもので、必ずしも正確ではありません。

①江戸のまちには長屋が多かった。その理由の一つは、当時100万人の人口のうち50%を占める庶民が、江戸のまち全体の約15%の面積に住んでいたから（全体の70%は武家屋敷、残り15%は寺社敷地だったそうです）。

②長屋住まいの庶民は必ずしも貧しくはなかった。「宵越しの銭は持たぬ」というのは、江戸っ子の気っ風きっふうのよさを表す言葉であるが、その背景には、翌日にも確実に仕事があり生活費を稼げる状況があったという事情がある。

③長屋住まいのおかみさんたちは、昼間亭主が物売りや大工などの仕事に出掛けると井戸端会議で自分の亭主の甲斐性かいしやうの無さを嘆きあつた（これは、隣近所の関係を良好に保つ秘訣であったそうです）。また、盛り場ひびつ（当時の盛り場とは浅草の観音様や目黒の不動尊などの寺社仏閣）へ連れだつて出掛け、グルメ巡りのようなことを楽しんでたという記録も残っている。

④江戸は、まち全体が経済的に豊かであった。江戸時代は参勤交代制があり、各藩主は、1年おきに江戸住まいをしており、藩主がいないときも藩主の妻子は江戸に住んでいる。それやこれやで年貢収入の約半分は毎年江戸に送られて江戸で消費されていたから、経済的に豊かなまちであった。

この話を聞いて、昔も今も同様であるように思いました。現代、首都東京には多くの会社の本社が集まり、人も財も集中しています。税収入が潤沢であるので、東京都は日本一財政が豊かな自治体です。また、公共施設も極めて充実し、総じて所得水準も高くなっています。人手不足が深刻な保育士など、多くの若者が東京に勤務しがります。国は、この状況を変えようと全国の自治体に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定を求めましたが、実現には極めて多くの課題があることが分かります。

川越市長 川合喜明

環境にやさしい行動を目指して 24
生物多様性を考えよう

環境政策課 224・5866

皆さんは「生物多様性」という言葉をご存じですか。生物多様性とは「多種多様な生き物が存在し、それぞれに個性を持ち、互いにつながり支え合いながら生きている」ということです。

私たちの生活は、多様な生き物が関わり合う生態系から得られる、食料・水・空気などをはじめとする恵みによって支えられています。しかし、人間のさまざまな活動によって、昔はどこにでもいた生き物がなくなるなど、生物多様性は失われつつあります。これを保全することは、私たちの命と暮らしを守ることにつながります。まずは、一人ひとりが日常の暮らしの中で生物多様性との関わりを実感し、身近なところから行動することが保全への第一歩となります。

そこで市では、生物多様性について身近に感じ、理解を深めるために、市内の自然観察を取り入れた「かわごえの生き物をたずねて」という講座を毎年開催しています。

私たちがずっと安心して暮らすためには、自然の中のさまざまな生き物を守っていくことが大切です。未来へ暮らしやすい環境をつないでいけるように、生物多様性の大切さを考えてみませんか。



昨年の「かわごえの生き物をたずねて」の様子